

鎮魂の人 大平正芳先生

藤波孝生

いろいろな方面に思いをめぐらし、深い洞察力をもつて想を練り、事に当られる大平さんがとても好きでした。例えば山間の蘭香とでもいうべきでしょうか。好きだからこそ、何回か突っこんで行ったことがあったのですが、その一つは東京都知事選をめぐってでした。大平政治が出発したのですが、どうもその姿が見え難い、国民にわかりにくいという声が多く出ました。そんな時に統一地方選挙がやってくる、政治の運び方やカラーが見えにくい時には、人事が一番わかりやすいのではないかと私も考えたのでした。地方の時代、文化の時代、そして若者に希望を与える政治、全国統一地方選挙のなかで最も目立つ東京都知事選に、大平政治展開の象徴的な候補者を立てて戦うべきであるというのが私どもの主張であった。牛尾治朗氏をかついで走り回るようになった。そのことで何回も何回も大平総理にお目にかかった。もともと大平、牛尾の人間関係は非常に長く深いものでありましたから、充分人物も意味もよくわかっておられ、むしろこちらが激励されるほどだった。都議会の空気が都連の動きなどで結果としては鈴木現知事を立てることになったのであったが、あの時、牛尾氏で突っこめなかつたのが今でも残念である。最後に大平総理のいわれたことは、「藤波君、政治の世界では最高が最適でない場合があるんだよ。僕も牛尾君が最高の候補者だと確信するが、こついう状況のなかで無理をして牛尾君を傷つけてしまつてはいかん。この際は大事にしよう」という話であった。総理から丁重になくさめられ、それでもなおおいさがつてみたものの、最後には引きさがらざるを得なかつたのであるが、総理は、いろいろな手続きと時間

をかけて最高のものへもって行くこととしておられる、自分の思ったようにするにはもっともっと助走をしてからだと考えておられるなということがよく理解された。ただ、心配は、大平総理が自分の思ったように力いっぱい前へ出て陣頭指揮をとる、それまで時間が与えられるのだろうかという心配が頭をかすめたのであった。

第二次大平内閣で労働大臣として働く機会を与えられ、おそばでいろいろご指導を受けることができたのは、私にとって生涯の幸福であった。私はよく梅原猛さんから「鎮魂」のことについてうかがっていたので、物価対策や春闘について報告した後など、総理と二人だけでそんなことを話すことがあった。

政治という仕事は、ある意味で鎮魂の儀式である。宗教にいう死者の魂を鎮め、落ち着かせることという仕事は多分に政治そのものである。戦争犠牲者への鎮魂、経済活動の盛衰への鎮魂、政治抗争の鎮魂、戦後三十五年を経て積ったうらみつらみの魂を鎮めることを、大平総理は考えておられたのであった。

しんぼう強く、時間をかけて、初めからベストにかけないでベターを選び、そのなかで新しい芽を育てる、という方法を考えておられたのではなかったか。内閣不信任案の可決という思わぬハプニングの後、衆議院の解散を決めた閣議で、総理は「私の不徳のために」という挨拶をされたが、誰一人、不徳のためだなどと考える者はいなかった。その閣議に連なっていて、また私の頭に「時間が与えられるだろうか」という思いがよぎった。

ダブル選挙開始の第一声に立たれた大平総理の演説は、鬼神もこれを避くと思わせる迫力に満ちたものであった。テレビでそのようすを見て、「総理はいよいよ陣頭指揮に乗り出されたな。ぎりぎりの事態のなかで、時間を度外視して乗り出されたな」とハツとしてそのお姿を見つめたのであった。結局、その「乗り出し」が命取りとなった。大きな足跡を残された大平正芳先生を偲び、「時間」を与えてくれなかった天を恨むばかりである。

額の花尊さいのち召されけり

孝堂

(衆議院議員・第二次大平内閣労働大臣)